

ラホヤ村通信

(3)

高垣愉佳

1. 原則と交渉

何かある度に裁判だ！と言うくらいに、アメリカは法治国家だ。そして、法律で規定されているもの以外にも、ありとあらゆるものがシステム化され、ルールに則って動いている社会だ。しかし、アメリカではルール自体よりも、ルールの先にあるもの、ルールを作った目的を大切にすらしいということが分かってきた。というのも、交渉することで、原則ではないイレギュラーな対応を受けたことが何度もあるからだ。

到着した次の日に、一番に銀行に行った。一刻も早く口座を開設して、日本から送金してもらわなければいけなかったからだ。しかし、私たちはソーシャルセキュリティーナンバーを持っていなかった。ソーシャルセキュリティーナンバーというのは、市民・永住者・外国人就労者に割り当てられる社会保障番号である。口座開設にはソーシャルセキュリティーナンバーが必要だと聞いていた。パートナーは外国人就労者ではあるのだが、日本で雇用されているのでソーシャルセキュリティーナンバーが無いのだった。

無いものは無いけれど、口座開設してもらわなければ困るので、とにかく窓口へ行って事情を話し、交渉してみた。どうでもいいことなのだが、対応してくれた職員さ

んの名前は“エンジェル”さんだった。アメリカ版キラキラネームか？と思いつつ、何となく上手く事が運ぶのではないかとという予感がした。

「どちらからいらっしゃいましたか？パスポートを拝見出来ますか？」と言われて、「日本からです。」とパスポートを見せると、「オッケー、パーフェクト！」とにっこり微笑まれた。何がオッケーで、何がパーフェクトなのかよく分からないのだが、その後いくつか入国関連の書類を見せた後に、あっさりと口座は開設された。

後日、知り合った同じくソーシャルセキュリティーナンバーを持たない外国人にその話をした。私の話を聞いて彼女も同じように同じ銀行に行ったが、断られたということだった。

私たちはルールに 100%はあてはまらなかったけれども、ルールの目的とするところはクリアしていたので口座開設が出来たのだろうと思った。この場合、ルールの目的は、不法入国者などの口座開設を防ぎ、不必要な海外送金を防止するくらいのところだろうと思う。

口座が開設出来たので、次にガスと電気の申し込みをした。ルールとしては、実はこちらでもソーシャルセキュリティーナンバーが必要なのだが、銀行の時と同様に事情

を話して入国時の書類を見せたところ、あっさりとし申し込みが出来た。

銀行、ガス、電気とうまく行ったので、「何だ、ソーシャルセキュリティーナンバーが無くて大丈夫なんだ。」と思い始めた矢先に、ルール厳守の壁にぶち当たった。相手は、テレビとインターネットを扱うタイムワーカーだった。「ソーシャルセキュリティーナンバーも無ければクレジットヒストリーも無い人を、どうやって信用しろと言うのか！」と断られた。昨日、銀行口座を開いたばかりの私に、クレジットヒストリーがあるはずは無かった。

まあ、今までが上手く行きすぎてたんだ。必要書類の一部が欠けているわけだから、日本だったら、きっと例外など認められるはずもなく、銀行口座開設の時点で断られてただろう。テレビとインターネットは無くても生きていけるから、最悪がまんしようと思った。

夜になって、教授兼不動産屋のエレーナから電話があった。「どう？生活セッティング上手く行ってる？」上手く行ってるが、テレビとインターネットを契約するのは無理そうだと状況を告げると、エレーナは憤慨して、「明日、私のオフィスで一緒に交渉してあげるわ！」と言って電話を切った。

翌日、エレーナのオフィスからタイムワーカーに電話をかけて、昨日申し込みを断られたのだけど何とか考えてもらえませんか？と再度交渉した。きっちり話を詰める為に、今回は電話通訳を介して交渉した。

電話通訳：郡のサービスで、ライフラインや医療に関する時に、郡内で待機している通訳に電話のラインをつないで三者通話の形で通訳が受けられる無料サービス。

しかし、やはりタイムワーカーの回答は同じだった。電話のやり取りをスピーカーで聞いていたエレーナは、「保証人が居たら事態は変わるのかしら？」と聞いた。「保証人まで付いてくれると言うのなら、もちろん。」とタイムワーカーは答えた。まさか、エレーナさんが保証人になる気か？と聞いていたら、「また後でかけ直すわ。」と言ってエレーナは一旦電話を置いた。

私たちには、保証人になってくれるほど親しい知人はアメリカには居ないのに、どうするのだろうか？と聞いていたら、「いいアイデアがあるから、私に任せておいて！」と笑っている。

エレーナが次に電話を掛けたのは、ガスと電気の会社 SDGE だった。サンディエゴでは、この会社が電気とガス両方を扱っている。関西電力と大阪ガスが合体したような会社だ。

「不動産屋のエレーナですが、ユカは英語が堪能では無いので、代わりにかけました。彼女も今隣に居ます。」と前置きして、タイムワーカーとのやり取りについて説明し始めた。そして、「ソーシャルセキュリティーナンバーやクレジットヒストリーが無いから信用出来ないと言う、タイムワーカーの理屈は非論理的です。アメリカに来るのが初めてで、来たばかりの彼女にクレジットヒストリーがあるはずは無いし、むしろあったとしたらそちらの方が問題でしょう？論理的に考えてくださいね。」とやっている。突然そんな話を聞かされて、さぞや困っているだろう SDGE は意外にも、「エレーナさんの言う通りだと思います。タイムワーカーは非論理的だわ。」と同意している。

そして、エレナは続けた。「確か、彼女は既にガスと電気を 1 年間使用する契約をお宅と結んでいますよね。その契約は信用があるから結ばれたわけで、そちらの会社は彼女を信用しているということになりますよね。タイムワナーは保証人があれば契約してもいいと言ってるんですが、SDGE さんに保証人になってもらえないかしら？」

無理！無理！絶対無理やって！電気とガスの 1 年契約しただで、そんなの絶対無理ですー！と心の中で大きく叫んだ。が、私の耳に飛び込んで来たのは意外な回答だった。「ご事情は理解しました。いいですよ。保障しましょう。タイムワナーから問い合わせがあったら、そのように答えます。」

うそー！？と目を丸くしている私に、親指を立てたグーのポーズでエレナが笑っている。こうして無事に我が家にテレビとインターネットが開通したのだった。

交渉次第で何とでもなるくらいなら、初めからルールなんて無くてもいいじゃないかという考え方もある。日本社会のように、ルールに厳格であるからこそ守られるものがある、ということも疑いようが無いだろう。しかし、柔軟な対応で救われることがあるのもまた事実だった。どちらがいいと言うことは出来ないが、日本とは違う社会に来たのだということを身を持って理解した。

2. 私は spouse(配偶者)です。

パートナーが働いている大学にはインターナショナルセンターがあり、外国人留学生のみでなく、外国人労働者の家族もイン

ターナショナルセンターが支援する対象となっている。渡米後一週間以内にオリエンテーションを受けることが義務付けられており、オリエンテーションの後に希望者はインターナショナルセンターからの情報をメールで受け取る手続きをする。こちらに知り合いが全く居ない状態で渡米した私は、迷うことなく手続きをした。

インターナショナルセンターでは定期的に様々な会が催されている。週に一回行われている有志による編み物教室以外は、全てインターナショナルセンターが主催している。ワールドランチ(各国の料理を食べながら、各国の文化紹介を受ける会。主催国は毎週異なる。)が週に一回。交流カフェが週に一回。各国の料理教室が月に一回。その他に不定期で、ハロウィンやクリスマスパーティーなどが開催されているらしかった。

現地に知り合いが居ないということは、もちろん不安でもあり、寂しくもあるのだが、どこのスーパーで買い物したら良いか?と言うような、生活に密着した情報入手するのも難しいということもあり、私は人との出会いを求めている。

そんなわけで、とりあえず直近で開かれる交流カフェに参加してみた。交流カフェは、一つの建物の中で 3 つのグループに分かれて行われていた。マミー&ダディーと呼ばれる親子で一緒に遊ぶグループ、カンバセーションテーブルと呼ばれるディスカッションをするグループ、それに毎回違う講師を迎えて手芸を行うグループの 3 つだった。子供は居ないし、手芸は好きでない私は、英語も出来ないのだが、とりあえずカンバセーションテーブルに参加すること

にした。

カンバセーションテーブルに参加というとかっこ良く聞こえるのだが、実際にやっていることはというと、無料のコーヒーを片手に、うなづいたり、時には首を横に振ったりしながら、ただただヒアリングに徹しているだけだ。実際にディスカッション中に発言したのは10か月で3回程しか無い。私の英語力では一対一の会話は何とか成立したとしても、大勢の人の意見が飛び交う中で、そのスピードに合わせて発言することは難しい、と言うよりはほぼ絶望的だった。一度はディスカッションが終わってから、同じようにほとんど発言しない中国人の友人と共に、アメリカ人のボランティアさんに呼び出され、「なぜ発言しないのか？」と軽く注意を受けたこともある。

そんな状態なので、今にして思えばよく参加しようと言う気になって、実際に参加し続けていたものだと、我ながら自分の怖いもの知らずさ加減に感心する。しかし、この怖いもの知らずさが功を奏して、カンバセーションテーブルへの参加を通して、英語のみならず、様々なことを学び続ける事が出来たように思う。

洋の東西を問わず、初めてどこかに参加した時というのは自己紹介を求められる。カンバセーションテーブルでも新しい参加者は自己紹介を求められた。幸いなことに、私が初めて参加した日には、同じように初参加の人が多く、更にラッキーなことに私の自己紹介の順番は後で回って来たので、先に自己紹介を済ませた人の言い方を真似することで自己紹介を乗り切った。

ほとんどの人の自己紹介は次のフレーズで始まっていた。「こんにちは。〇〇(国の

名前) から来た〇〇(名前) です。パートナーが〇〇(パートナーの所属) で〇〇(パートナーが行っている事) しています。私は spouse (配偶者) です。私は母国では〇〇(母国での仕事) していました。今ここでは〇〇(アメリカでやっていること) しています。」こういうことを一通り言うと、アメリカ人のボランティアさんが、追加で聞きたい質問をしてくれるという流れだった。〇〇の部分、自分の状況を表す単語に置き換えれば何とかなるというわけだ。

人が自己紹介をしているのを聞きながら、なるほど、なるほど、spouse って何だろう？と電子辞書のキーボードをたたきながら、自分の番が来るのを待った。

不勉強な私は spouse という単語をここで初めて覚えたのだが、wife ではなく、皆がわざわざ spouse という単語を使うにはそれなりの理由があるに違いないと思った。そして、自分が自己紹介する時にも、今覚えてたこの単語を使って自己紹介をした。

咄嗟にこのような判断をしたのには理由があった。昔、法科大学院生と合同で行ったカウンセリングの授業の中で、配偶者をどのような言葉を使って表現するかということの重要性、のようなことがテーマになっていた事を思い出したからだ。

誰かに確認したわけではないが、その後も wife という言葉を使って自分を表現する人にまだ出会っていないところを見ると、日本で習う英語以外の場所では、spouse が主流になっているのかもしれないと思う。

spouse の日本語訳は、配偶者ということになっているが、正確にはそうではないらしいということも分かった。配偶者というのは婚姻関係にある相手のことを意味する

からだ。英語の **spouse** は婚姻関係に無い場合にも使われている。

ブラジルから来たアレックスがそうだった。「ブラジルから来たアレックスです。パートナーが博士号を取りに来たので、仕事を辞めて一緒にアメリカに来ました。**spouse** です。」と自己紹介していたので、てっきり奥さんが大学院に留学して、旦那さんであるアレックスが付いて来たのだと思っていた。因みにアレックスは男性だ。

しかし、これは全く私の見識の狭さから来る思い込みだった。後日、アレックスと親しい人から聞いた話では、アレックスのパートナーは男性で、二人は法律的には結婚はしていないということだった。

正確には **spouse** のニュアンスをどう和訳すればいいのか、ただでさえ英語をよく分かっていない私には分からないが、少なくともここで言う配偶者という訳の内容は、必ずしも婚姻関係によらず、また必ずしも男女の組み合わせでもないということは分かった。

一部の国や地域では同性婚が合法化されている所もある。日本の夫婦の概念が、世界のそれに相当する概念とズレを生じ始めているのではないかと思った。そして、通常、概念は言葉で表されることが多いはずなので、概念のズレは言葉の使い方のズレを通して垣間見ることができないのではないかと思った。



インターナショナルセンターで毎週行われるカンパセーションテーブル